

ハンガリー動乱50年:カーダール政権誕生の原罪

盛田 常夫

1988年5月、ハンガリー社会主義労働者党書記長カーダール・ヤーノシュは自ら議長に退く決断を下し、動乱から32年弱の長期にわたって続いたカーダール時代が終焉した。議長職が解かれたのは翌年5月。その2ヶ月後、ナジ・イムレ復権の裁判決定が出た日に、この世を去った。

ソ連の戦車に守られてブダペストに戻り、権力に就いたカーダールの評判が良いはずはなかった。後ろ盾のソ連共産党も、カーダールを一時的なカードと考えていた。しかし、国際情勢の目まぐるしい変転の中、政治支配の極意を体得したカーダールはソ連共産党の信頼を得ただけでなく、国内でも国民融和政策を展開して、次第に国民的支持を獲得することに成功した。ソ連型モデルから距離を取るカーダールの姿勢と政策は、経済改革を推進するハンガリー型社会主義というイメージを作り出した。

「カーダールは経済改革の熱心な推進者であったことはなかったが、推進するにせよ抑制するにせよ、その決断を主導した」というのが、改革全体を取り仕切ったニエルシュ・レジュエの評価である。改革の発進を決断したのも、またソ連の批判を受けて改革にブレーキをかけたのも、カーダールである。常にソ連共産党の出方を伺いながら、時には改革を、時には抑制へと舵取りするカーダールに、彼の統治手法の極意が隠されている。

亡霊に悩まされた最後

これまで、カーダールの引退後の最後について語られることがなかったが、権力の出生を知る上で重要な興味深いエピソードがある。

1980年代に入って健康状態が悪化したカーダールは、長期の休暇を取ることが多くなった。1988年に書記長職を離れてから、さらに老化現象が進み、加えてカーダールの生涯にかんする長時間のインタビューが予定される段になって、

過去の事件が想起され、記憶の混濁と自らが手を汚した二人の亡霊に悩まされたと言われている。言うまでもなく、その亡霊とはライク・ラースローとナジ・イムレである。ともにハンガリーの社会主義成立史に残る二つの世界史的事件の主人公である。

書記長辞任の決断直前まで、カーダールは近い友人たちに国内の反体制勢力の情勢を打診し、進退の是非を含めた助言を求めていた。反体制の思想が息を吹き返し、反共産党の非合法政治組織が活発化したことに神経を尖らせ、それが「第二の56年事件」になると考えていたようだ。権力者としての直感が、進退の判断を求めた。

書記長職を離れ、病氣療養していたカーダールは、突然、翌年1989年4月の社会主義労働者党中央委員会に出席し、取り留めのない長い発言を行った。病院から党本部へ出発したカーダールを制止すべく、主治医は党本部のグロース書記長に電話し、出席させてはならないと忠告したが、グロースはカーダールを制することなく発言させた。中央委員には初めて聞かされた事実もあったようだが、すでに正常な思考を維持できないカーダールの老醜を目の当たりにすることになった中央委員は、改めてカーダール時代が過去のものになったことを悟った。

解任決議直後のカーダール

翌5月の中央委員会において、カーダールの議長職解任と年金生活への引退が決定された。グロースがカーダールの中央委員会出席を制止しなかったのは、この決定を納得させるための意図があつてのことだとも言われている。党本部のカーダールの予定表には、中央委員会開催日の夕刻に、ニエルシュ・レジュエとの会談予定が記載されていたというから、少なくともグロースはカーダールの来訪を予想していたはずだ

からだ。ニエルシュによれば、短時間の話し合いの中で、カーダールは「ナジ・イムレが首相辞任の署名をしなかったことが処刑の結末を導いた」ことを繰り返し語ったという。

カーダールには議長職解任決定を理解する能力が残っており、この決定を伝える使者がカーダール邸に到着した時には、すでに引越しの準備を完了していたという。権力を下りることはすべてを失うことだと考えていたのだ。

労働者出身で、権力者になっても清貧に甘んじていたカーダールを高く評価する人は多い。周辺国の権力者が蓄財や肉親の重用、奢侈に溺れていたのとは対照的に、カーダールは粗末な邸宅に、活動家の妻とともに質素な生活を送っていたことで知られている。その邸宅すら明け渡す準備を終え、庭で引越しの迎えを待っていたという。もちろん、誰も引越し指示をしていなければ、引っ越し先がある訳でもなかった。しかし、カーダールは最後の力を振り絞って、解任決定の意味を理解しようとしたのである。

ライク事件におけるカーダールの役割

1949年、現役の外務大臣ライク・ラースローがアメリカのスパイ容疑で逮捕され、処刑された事件は戦後の社会主義成立史の暗黒時代を象徴する事件として知られている。1956年動乱がライクの復権と埋葬式を契機に勃発したことを考えれば、この事件の持つ意味は重い。

ライクが逮捕された1949年、カーダールは内務大臣の職にあった。40歳に満たないカーダールとライクが政府の要職に就けたのには、幾つかの理由がある。

ひとつは、ハンガリー国内で戦前から活動家として生き延びた共産黨員、とりわけ有能な指導的黨員が少なかったこと。

二つは、戦後のハンガリー共産党の再建は、ソ連帰りの共産黨員で、ソ連共産党の指示を受けた人物が主導したこと。

三つは、ソ連帰りの共産党指導者には、国内の状況を良く知る黨員を重用することで、組織再建を速やかに実行する必要があった。

ハンガリー共産党の戦後再建を主導したのは、ラーコシ・マーチャーシュ、ゲルー・エルヌー、ファルカシュ・ミハイ、レーヴァイ・ヨーージェフである。皆、戦前からの党指導者で総本山のソ連帰りという箔をつけていた。トロイカとも、四人組とも呼ばれた最高指導グループを形成した。その彼らが、国内黨員で知識人出身のライクと労働者出身のカーダールを重用することで、国内黨員の組織化を図った。

ライク事件は、冷戦が始まり、国内の引き締めを図るために、スターリンが「アメリカのスパイ摘発」と称して、ソ連党幹部の逮捕・処刑を始めたことに触発されたものだ。当時、ラーコシはスターリンの庇護を受けたいばかりに、スターリンとベリアのシナリオに従う「スパイ摘発」キャンペーンを実行した。この謀略はトロイカあるいは四人組で立案されたと考えられている。国内組の黨員から犠牲者が選ばれ、労働者出身のカーダールではなく、知識人出身のライクが標的になった。党の結束力を考慮して、労働者出身カーダールは犠牲対象から外された。

戦前の共産主義運動時代からカーダールとライクは知己の仲であり、カーダールにはライク事件が捏造されたものであることは分かっていた。にもかかわらず、内務大臣としてこの事件を指揮する立場に追い込まれた。カーダールが政治家として初めて手を汚した事件だった。捏造事件の首謀者ではなかったが、醜い汚れた仕事に加担しなければならなかった苦悩と悔悟の情は、死ぬまでカーダールの脳裏から離れることはなかった。

翌1950年、カーダールは自らの意思で、内務大臣を辞し、その1年後の1951年に、ラーコシ一派の策略に嵌って逮捕され、終身刑の判決を受けた。同じくラーコシ一派の犠牲になったことから、ライク事件の係わりを免罪できると考えていた節がある。実際、1960年代初期にラーコシ時代の清算決定を行う際に、ライク事件における自らの役割には一切触れない報告が準備され、実際の清算人事においても、過去の罪で裁くのではなく、その後の行動によって評価すべ

きという立場を主張したのは、自らの負い目を正当化する意図があったと考えられる。しかし、意識の奥底から、手を汚した記憶が消えることなかった。

ナジ処刑におけるカーダールの役割

ライク事件はラーコシー派の策略に乗せられたものだったが、ナジ・イムレの処刑はカーダール自らが主導したものだった。その意味で二つの事件はまったく性格が異なる。

ただ、カーダールの名誉のために付言しておけば、ナジ・イムレ他の政府メンバーを虚言でユーゴスラビア大使館からおびき出し、ルーマニアに送還し、かつ再びハンガリーに戻して裁判にかけるシナリオは、すべてソ連共産党が仕組んだものである。この一連のシナリオにおいて、ナジの運命は既定のものだったと言える。

しかし、カーダールも主張しているように、早い段階でナジが首相辞任を表明していれば、処刑にまで至らなかった可能性が大きい。他方ナジ逮捕から時間が経過する中、ソ連共産党内部のクーデター騒ぎやフルシチョフの平和攻勢路線で、フルシチョフ周辺では「絞首刑宣告の後に特赦」という方法が何度も検討された。

この辺りの詳しい事情は次号に記すが、最終的に、ナジの取り扱いにはハンガリー共産党（社会主義労働者党）に一任された。

動乱から時が経つに連れ、カーダールは自らの権力基盤が安定しないことに苛立っていたと言われている。なぜなら、一方ではソ連に亡命中のラーコシ他の指導者が、政権返り咲きの機会を狙っていた。他方ではナジが赦免されれば、ナジが政敵となる時が来るかもしれないという不安に襲われていたからだ。56年問題を早く決着させたいカーダールには、ナジ特赦という選択肢は残されていなかった。ナジ以外の小物の「扇動者」が処刑され、ナジだけが特赦されるのは理に合わないとする意見も多かったと言われる。カーダールはナジの処刑によって、政権の正当性が問われる政府の臨時性を清算する道を選んだ。

カーダールの原罪

ナジ処刑にたいするカーダールの係わりが以上のことで済むものなら、カーダールがナジの亡霊に悩まされることもない。政権安定のために、ソ連のシナリオに乗ったと釈明すれば良い。権力者であれば、その程度の権謀術数は許容範囲にある。

しかし、カーダールがナジの亡霊に悩まされたのには、十分な理由がある。ナジが有罪なら、カーダールにナジを裁く資格がないという明々白々の事実が存在するからである。このことは、カーダールが生涯かけて自ら口外せずに、頑として黙り通した事実である。死の最後の瞬間まで、動乱勃発から動乱収束に至る自らの役割は、あの世に背負っていくべきカーダール政権誕生の原罪だったのである。

1954年に監獄から解放されたカーダールは、1956年6月のラーコシの追放に伴い、ハンガリー勤労者党（共産党）の政治局員に選出され、指導部書記に任命された。長期のユーゴスラビア訪問から帰国したその日（10月23日）に動乱が勃発した。即座にこれを「反革命的」と断定し、デモ禁止令を発した。しかし、その後の事態の急展開を反映して、勤労者党指導部内部の見解が分かれ、カーダールの情勢判断も揺れた。10月28日には勤労者党の見解が180度変わり、動乱の革命性を容認し、党の「6人委員会」議長に選ばれた。10月30日には党幹部会の見解をまとめる議長役を務め、複数政党制の容認と連立政権樹立を決定し、ナジ・イムレを首班とする臨時政府の国务大臣として、7名構成の政府閣僚の一員となった。そして、10月31日には勤労者党を解党し、再生共産党である社会主義労働者党を設立し、その執行委員会議長となった。そして、11月1日、政府の最高メンバーの1人として、ナジ・イムレとともに、ワルシャワ条約機構からの脱退と中立国への移行を決定し、夕刻放送予定のラジオ収録でこれを宣言したのである。しかし、カーダールはこの夜の放送を聞くことなく、ソ連の軍用機でモスクワに向かっていった。

（関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい）